
コナン×ハヤテ 哀とナギの出会い

ラティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナン×ハヤテ 哀とナギの出会い

【Nコード】

N4155G

【作者名】

ラテイ

【あらすじ】

コナンとハヤテのコラボ小説です。

第1話：阿笠宅にて…

米花町2丁目22番地に、阿笠博士宅が建っている。今日はそこに少年探偵団のメンバーが集まって、博士の作ったゲームをするこ
とになった。少年探偵団のメンバーは江戸川コナン、灰原哀、吉田
歩美、小嶋元太、円谷光彦の5人だ。その5人は学校の帰りにその
まま博士の家により、ランドセルを乱暴に机の上に放り投げるとゲ
ーム機の前に座ってスタンバイした。しばらく待つと、博士が台所
付近から手におやつやジュースを乗せたお盆を持ってゲーム機の横
にそつと置いた。

「なあー博士！！早くやらせてくれよ！」

「そうですよ！楽しみですね。」

「電源入れてよー！」

博士は3人にせかされるがままにゲーム機の前に立ち、電源を入
れた。すると、画面上にゲームの題名が大きく表示させた。見たと
ころ、どうやらアクションゲームのようだ。

「……おおお ……！！」「」

3人が声を弾ませた。3人は期待に胸をふくらませ、目がキラキ
ラと輝いていた。

「あとは、このボタンで選択肢を選んで ……」

博士がゲームのコントローラーを持ち上げて操作した。画面はプ

レイヤー設定の画面へ飛んだ。ここで博士はボタンの説明を3人にすると、コントローラーを元太、歩美、光彦に1つずつ渡した。

「じゃあ、あとはごゆっくり。」

「……はぁーい!!」「」

3人は元気に返事をする、そのあとはゲームに食い入るかのようにしてプレイし始めた。

「ん…?なんだ 新一と哀君はやらないのか?」

博士はお盆を流しに持って行こうとした足をコナンの前でとめ、眉を少し下げた。

「ええ…。私は見ているだけでいいわ。」

哀は肩をすくめた。

「俺もいいよ。元太たちにやらせておく。」

コナンは、ゲームに夢中になっている3人の背中を見つめて言った。博士は分かったといい、お盆を片手で持って流しに向かった。それを確認した後、コナンは哀に話しかけた。

「そういえば、灰原は知ってるか?」

「何を?」

「なんかよく知らねえんだけど、こんど米花町に超大金持ちのお嬢

様がくるっておっちゃんが騒いでたんだ。」

おっちゃんとは、毛利小五郎のことである。

「大金持ち？ああ…知ってるわ。確か名前は三千院 凧ナギ…だったかしら。」

哀は天井を見上げて何かを思い出すように答えた。三千院家は世界的に有名な財閥で、そのお嬢様が住んでいる屋敷には、三千院家専属のメイド、不死身なことで有名な青い髪の執事、他多数が住んでいる。

「三千院家は名の知れた財閥だからな…。この名を知らない者はいないとまで言われている…。」

コナンは机の上に放置された1枚の派手な柄のピラを拾い上げた。そこには大きくゴシック体で“三千院家のお嬢様、米花町にご訪問”と書かれている。

「こんなに宣伝していいのかよ…。こんなことしたら暗殺者アサシンなんか狙われちゃうぜ…？」

お金持ときたら、その財産を奪うべく後継ぎの命を狙うものが出てくる。こんな広告なんか大きく宣伝してしまうと現在いる場所を特定されてしまい、殺し屋がそこを狙ってくるかもしれない。

「なのに、なんでこのお嬢様は平気で宣伝するんだ…？」

そう疑問に思ったコナンは、ピラを裏返した。そこには、なぜピラシにこんな危険を冒してまでこんなことを書くのか？ という

記事が載っていた。その質問に対しての答えは、こつ大きく記されていた。

“大丈夫。私にはハヤテがいる。”

はて？このお嬢様はその“ハヤテ”というやつがいれば大丈夫なのか？そんなわけないだろ？しかし、よく端っこを見てみると“この宣伝を勝手にやりだしたのは愛沢家”と載っていた。コナンは目を細めてそのチラシをしばらく眺めていたが、飽きてきたのかチラシを机の上に放り投げて違うチラシを手に取り、目を通し始めた。投げたチラシはひらひらと不規則に降下し、ゆっくりと机に着地した。哀は、コナンが別のチラシを読みながら元太たちに近寄って行ったのを確認するとコナンの放り投げたビラを手に取った。そして一通り字を目で読む。

「ふーん…三千年家ねえー…。」

哀はビラを目で追った。やけに大きめの字が多かった。そこまで目立たせたいの…？と、哀はあきれ半分でビラを読んだ。ふと、哀の目に1つの文が入った。その文を哀は何度か見返す。端っこの方に小さく書かれていたので、さっきまで気がつかなかった。その文は、“三千年家の執事、綾崎ハヤテを倒すと三千年家の遺産がもたらえるという噂が広まっている。”という文である。

「ねえ。」

哀はコナンの背中に呼びかけた。コナンは即時に振り返る。そのコナンを哀は手招きして呼んだ。

「なんだよ。」

「コナンはめんどくさそうに、頭をかきながら目を細めて歩いてきた。」

「この文章…。どういう意味？」

哀は問題の文章を指差し、コナンに見せる。コナンはじーっと文を見つめ、しばらくするとさっと顔を上げた。

「ああ…これは前にギルバードってやつが三千院家の遺産を手に入るために、三千院 凧ナギの叔父、三千院 帝みかどに遺産を自分にゆずらせる条件を聞いて、それで三千院 帝みかどが答えたその条件は…三千院 凧ナギに泣きながら謝らせるという条件だったんだ。」

コナンは人差し指を立てて長々と話した。

「なんであなたはそんなに詳しく知っているの？」

哀はジト目をコナンに向けた。

「インターネットに乗ってた。」

「本当に大丈夫なのかしら、三千院家…。」

哀は心配そうな表情になった。

「で？なんでそれに綾崎ハヤテって人が絡んでくるのよ？」

「ああ…それは…」

コナンは、また人差し指を頬にくっつけて話し出した。

「三千院 凧が「そんな恥ずかしいことをするなら死んだ方がマシ」と言っているのでこれではなかなか条件を満たすことができないと考えた帝みかどつてじいさんが、凧ナギが泣きながら謝る可能性のある方法を考え出したんだ。その方法が、“三千院 凧ナギの執事である綾崎ハヤテをボコボコにする”というものらしいぜ。」

コナンは説明を終えると、空咳からせきを1つした。

「こんなもんかな？」

「なるほど…。その綾崎ハヤテって執事は三千院 凧ナギにとって何か大切な人間で、その執事を痛めつけたら凧ナギって子が“これ以上綾崎ハヤテを痛めつけるのはやめてほしい”というような気持ちになり、謝るかもしれないってこと？」

「だと思っぜ。」

コナンは少しずれた眼鏡をかけなおし、元太たちに目を移した。

「ま、おれたちには全然関係ない話だけだな。」

コナンは哀に振り向き、首を少し傾けた。

「そうね。私たちがあのお嬢様にかかわりを持つなんてありえない話だわ。」

哀は肩をすくめた。そのころ、ちょうど元太がゲームオーバーになつて、騒いでいるところだった。

「げ！！まじ！？ゲームオーバーかよー。」

元太は頭を抱えた。その元太の横で余裕の笑みを見せる光彦がふつと笑つた。

「まだまだですよ、元太君。もっと相手にダメージを与えて画面外にふつ飛ばさないと。」

光彦は素早い動作でボタンをプッシュして操作し、次々に相手にダメージを与えていく。そして最後はスマッシュ攻撃で画面外にふつ飛ばす。

「なんかスブラ要素が入ってるなあ。」

コナンはゲーム画面を眺めながら博士にそう言った。

「たまたま知り合いの家に行ったときにその家の子供がスブラをしていてのお…。それで真似させてもらったんじゃ。なかなかいい出来じゃろ?。」

博士は鼻の下をさすりながら自慢げに言う。その博士に哀はジト目を向けた。

「…作る前に任天堂に許可はとつたのかしら。」

哀は三千院家とはかわりを持つことは絶対はないと思つていたが…これが後にある拍子に知り合うことになる…。そして、知り合

ったことによつて、大きな事件に巻き込まれることになつてしまふ
など、そんなことを哀は知る由もなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4155g/>

コナン×ハヤテ 哀とナギの出会い

2010年10月11日11時28分発行